大決壊！
ふくらむぱんつ

Σ一章目
友達のブルマを穿いてオナニー！　P５

Σ二章目
栞ちゃんのぱんつはおむつで　P32

Σ三章目
もこりっ、膨らむブルマ　P56

Σ四章目
響虎のわざとうんちおもらし　P74

Σ五章目
栞のこっそりオナニー　P103

Σ六章目
授業中のうんちおもらし事件　P130

Σ七章目
初めてのおむつ登校！

Σ　授業中のうんちおもらし事件

「ん……。もう、朝……」

　栞(しおり)が目を覚ましたのは、すっかり明るくなった朝の六時半のことだった。

　まだ目覚まし時計は鳴っていない。
　枕元に置いてある目覚まし時計のスイッチをオフにすると、お尻に纏わり付いてくるのは冷たくネットリとした感触。

　そのときになって栞は思いだす。

「そっか。響虎(きょうこ)ちゃんのぱんつを穿いて寝たんだっけ」

　ゆうべはおむつのなかに響虎のしましまショーツとブルマを穿いたままで寝たのだった。

　寝ているあいだにおねしょをしたのだろう。

　ショーツタイプの紙おむつは鮮やかなレモン色に染まり、前のほうまでパンパンに膨らんでいた。

「背中のほうまでぐしょ濡れになってる……」

　ショーツとブルマは、背中のほうまでグッショリと濡れていて、お尻にペッタリと貼り付いてきている。

　おむつのなかはどうなっているのだろう？
　怖いもの見たさで、おむつの腰ゴムを引っ張って、なかを確認してみると――、

　もわっ、もわわぁ……。

　おむつのなかから立ち昇ってきたのは、濃密なおしっこの匂い。

　アンモニア臭が湯気となって、あまりの臭気に涙が溢れ出してくるほどだった。

「凄い……黄色くなってるの……」

　おむつの内側は、鮮やかなレモン色に染め上げられていた。

　ブルマの腰ゴムも引っ張ってみて、ショーツを確認してみる。

「響虎ちゃんのぱんつ、黄ばんじゃってるの……」

　もわわ～ん……。

　濃密なアンモニア臭とともに露わになったのは、すっかり黄色く染め上げられたしましまショーツ。
　もはや白いところはなく、栞のおしっこによってぐしょ濡れになっていた。

「ぱんつ、ヌルヌルする……」

　クロッチの裏側は、愛液でヌルヌルになっていた。

　きっと寝ているあいだに、えっちな夢を見てしまったのだろう。

　クロッチどころか、お尻のほうまでヌルヌルになっていた。

「本当なら洗濯しないといけないけど……」

　だけど、せめて今日一日くらいは。
　栞は小さく頷くと、おむつを穿いたままでベッドから降りる。

　おねしょと愛液を一晩中受け止めてきた紙おむつは、ずっしりと重たくなっていた。

「今日はずっと響虎ちゃんと一緒……っ」

　栞は頬を赤らめて呟く。
　そしていつものようにポールハンガーに掛かっているセーラー服を着ていった。

「よしっ、今日はなんかいいことがありそうっ」

　スカートを穿いて、ぽんぽんっ、お尻をはたく。
　おむつのなかには、響虎ちゃんのブルマとショーツ。

おむつを包み込んでいるスカートはセクシーに膨らんでいるけど、まさか栞がおむつを穿いているだなんて、誰も想像しないに違いなかった。

☆

チュンチュン。
小鳥の鳴き声に目を覚ますと、もう既に朝になっていた。

のっそりとベッドから身体を起こしたのは、ブラジャーとブルマというあられもない姿で寝ていた響虎だ。

ぬるり……。

お尻に感じるのは、コンニャクのような肌触りになっている栞のショーツ。
もうブルマの外側までヌルヌルに濡れそぼっていた。

「うう……。脱げなかったぜ……」

ゆうべは栞のショーツとブルマを穿いて、何回もオナニーをしてしまった。

　しかも寝るときにも脱ぐことができずに、穿いたままで眠りについた。
　響虎のお尻があった部分を中心として、シーツには巨大な世界地図ができあがっている。

　どうやら、寝ているときにおねしょまでしてしまったらしい。

「お、恐ろしすぎる……」

　怖いもの見たさで、ブルマとショーツを降ろしてなかを確認してみる。

　もわっ、もわわぁ……っ。

　立ち昇ってきたのは、甘酸っぱくも生臭い思春期の少女の匂い。
　ショーツのなかは……酷いものだった。

　愛液でクロッチの裏側どころかお尻のほうまでベトベトになっている。
　透明だった愛液は時間が経ち、やや茶色く変色してショーツの染みになっていた。

「ずっとおまたに食い込んでたから、大変なことになってる……」

　一晩中、ずっとおまたに食い込んでいたクロッチには、茶色い縦染みが刻み込まれていた。
　縦染みは、お尻のほうにまで広がっている。

「うう、自己嫌悪だぜ……」

　だけどいまから洗濯するわけにはいかない。

　登校するまでに間に合わないし、なによりも猫さんのフロントプリントのショーツなんて洗濯しているところをお母さんに見られたら、とても面倒臭いことになってしまうに違いなかった。

　こうなったら……、

「学校に穿いていくしかないぜ！」

　今日一日くらい栞ちゃんのショーツを穿いていても罰は当たらないはずだ。

　響虎はおもらしに濡れそぼった女児ショーツを穿いたままで、その上から何事もなかったかのようにセーラー服を着ていく。

　……ブルマは蒸れそうだから、ベッドの下に隠しておいて。

「今日はいいことがありそうな予感がするな！」

☆

（うおお！栞ちゃんのぱんつが、おまたに食い込んできてる！）

　登校してきた響虎は、栞のショーツのクロッチがおまたに食い込んできているのを感じていた。

　それでも顔には出さずに、自分の席につく。
　しばらくすると、栞も登校してきた。

（どうしよう。きのう交換こしたぱんつ、普通に考えたら今日返さなくちゃいけないけど……！）

　だけど栞のぱんつは、響虎のスカートのなかでぐしょ濡れになっている。
　とても返せる状態ではなかった。
　だから栞が登校してきた瞬間に、響虎は行動を起こしていた。

「栞ちゃん、ちょっとついてきて！」
「ふぇ!?」

　登校してきたばかりの栞の手を引いて教室を出る。

　やってきたのは、一番近くの女子トイレ。
　幸いなことに、朝の女子トイレには誰もいなかった。個室へのドアも全部開け放たれている。

「ど、どうしたのかな!?　急にこんなところに連れてきて」
「とにかく、こっちだ！」

　響虎は栞の手を引いて、一番奥の個室へと入る。
　ただでさえ手狭な個室。
　二人で入ると、ちょっとだけ窮屈に感じる。

　だけどそれだけ栞ちゃんを近くに感じられるということだ。
　和式トイレを挟んで、二人して向き合う形になった。

「ふぅ……」

　響虎は、ひとまず額の汗を拭う。
　だけど本当の山場はこれからだ。
　今日はぱんつを返すことができないと、しっかりと謝っておかなければ。

「栞ちゃん、ごめん！」
「ど、どうしたのかな、急に」
「栞ちゃんのぱんつ、きのうのうちに洗濯しなくちゃいけないって思ってたんだけど、どうしてもできなくて、その……！」

　もわわぁ……。

　響虎は頬を真っ赤にさせながらも、自らのスカートを捲り上げる。

　甘い湯気とともに露わになったのは、白い生地に猫さんの顔が描かれたフロントプリントの女児ショーツ。

　ただし白かった生地は何回もオナニーをしたから、茶色く変色した愛液によってまだら模様になっていた。

「きのうは我慢できずに、何回も、その……しちゃったんだ」
「わ、わたしのぱんつを穿いたまま……？」
「ああ。それに、おねしょも……」
「おねしょも……」

　それっきり、会話が途切れる。
　栞はビックリしているのだろう。無理もないことだと思う。

　だけどその数秒後。
　なぜか栞は、ホッと胸を撫で下ろしてみせるのだった。

「実は、わたしも……」

　栞ちゃんは、頬を赤らめながらスカートを捲り上げてみせる。

　露わになったのは、鮮やかなレモン色に染まっている紙おむつ。

　ショーツタイプの紙おむつは前のほうまでパンパンに膨らんでいた。

「あれから響虎ちゃんのぱんつとブルマを穿いて……その、何回もしちゃって……。いまも、おむつのなかに穿いてるの」
「俺の、ブルマと、ぱんつを……？」
「ほら」

　もわっ、もわわ～ん……。

　おむつの腰ゴムを引っ張って、なかを見せてくれる。

　濃縮されたアンモニア臭とともに露わになったのは、紺色のブルマ。そのなかに響虎のしましまショーツを穿いているところまで見せてくれた。

「す、凄え……。おむつのなか、蒸れてないのか？」
「うん。蒸れ蒸れになってる。響虎ちゃんのぱんつが、おまたに食い込んで、なんだか熱くなってきて……」
「うわぁ……」

　頬を赤らめて呟く栞に、響虎の鼓動は一気に早まっていた。
　それどころか、股間が熱くなって、

　じゅわわぁ……。

　クロッチの裏側に熱い蜜が溢れ出していく。
　トロッとした体液はクロッチでは受け止めきれずに、

　たらり――、

　響虎の内股を、一筋の愛液のしずくが流れ落ちていった。
　ぱんつのなかはおもらしをしたよりも酷い有様になっている。
　それでも。

「うおおおおお！　大好きだぜ！　栞ちゃん！」

　感極まった響虎は、栞の小さな身体を抱きしめていた。
　あまりにも急なことで、栞はビックリしてしまったのだろう。

「あっ！　あっ！　あっ！」

　しゅごおおぉぉぉぉぉぉぉぉ……。

　引き攣った栞のソプラノボイスとともに、スカートのなかから、はしたない水音が噴出してくる。

　どうやら失禁してしまったようだ。
　それでもおむつを穿いているから漏れ出してくる心配は、なにもない。
　目の前には、蕩けそうになっている栞の顔。

（やばい。キスしたくなってきてる……）

　だけどさすがにそれはダメだと自重する。
　ただでさえもう既に抱きついているのだ。

　キスなんかしたら、それこそ栞ちゃんに迷惑がかかってしまう。
　いま、この瞬間にキスをすれば、それは恐らく栞ちゃんにとってファーストキスになるのだろう。

　もちろん、響虎にとっても、だ。

（ここで俺とのキスが、栞ちゃんのトラウマになんかなったら、それこそやりきれないし……！）

　だからここはグッと我慢することにする。
　響虎は栞の身体を解放すると、

「おむつ、大丈夫そうか？」
「うん。あと何回かは大丈夫だと思う。それに……」
「それに？」
「響虎ちゃんのぱんつとブルマが守ってくれてる感じがするし。多分昼休みまで大丈夫っ」
「そっか。それはなによりだぜ！」

　響虎は栞の手を引くと、トイレの個室を出る。
　幸いなことにトイレには誰もいないようだ。

　もしもいまの会話を聞かれていたら大変なことになっているところだった。

☆

（ううっ、おまたがムラムラする……っ）

　響虎が気まずそうに内股を擦り合わせたのは三時限目の理科の授業中のことだった。

　だけどここで栞のぱんつを脱ぐわけにはいかない。

　女の子というのは、少しぐらいショーツを汚してしまっても平然としていなければいけないのだ。

　その証拠に――、

　響虎は、チラリと栞へと視線をやる。
　栞は何事もなく、黒板の文字をノートへと書き写していた。

　今日はずっと座学の授業だから、椅子に座りっぱなしだ。
　栞のことをずっと見ていたけど、今日は休み時間に一度たりとも席を立っていないようだった。

　たぶん、椅子に座ったままでおむつにおしっこをしているのだろう。

（さすが栞ちゃん。少しくらいおもらしをしても全然動じてないぜ……！）

　栞のおむつのなかでは、響虎のしましまショーツとブルマが蒸れ蒸れになって、クロッチがおまたに食い込んでいるに違いなかった。

（俺のぱんつも……ううっ、大変なことになってるぅ……っ）

　響虎が穿いている栞の女児ショーツは、ドロドロに濡れそぼり、おもらしをしたときよりも酷い状況になっていた。

　響虎は気づいていないことだが……、響虎のスカートには、お尻の染みが『♥』の形となって浮き上がっていた。

　それは初潮を迎えたときのような、恥ずかしい尻染みだ。

（ど、どうしよう……）

じゅわわっ。

それに漏れ出してきているのは、愛液だけではなかった。

今日はまだ席を立っていない。
それはまだ一度もトイレに行っていないということだ。

響虎の膀胱には、こうして大人しく授業を受けている瞬間にも、一滴ずつおしっこが膀胱へと濾過されている。

（おしっこまでしたくなってきてる……！）

じゅわっ、
じゅわわぁ……っ。

教室の時計を見上げてみると、授業が終わるまであと40分はある。
まだ授業が始まって半分も経っていない。

（さすがに早すぎる……！　トイレに行かせて欲しいなんて、言い出せない……！）

じゅわわっ。
じゅもももも……っ。

響虎は大胆で大雑把な性格をしているとはいえ、これでも思春期の女子だ。
授業中にトイレに行きたいだなんて……しかも授業が始まったばかりだというのに、言い出せるはずがなかった。

（我慢、我慢だぜ……！）

響虎は我慢することにした。
大丈夫。
まだ慌てるような時間じゃない。

（こういうときは、素数を数えて心を落ち着かせなければ……！）

１、２、３、５、７、９……！
って、１って素数じゃなかったような気が……!?

ジョボボッ！

意識が尿道から離れたその直後、チビッた……にしては多すぎる量が噴き出してくる。

　どうやら思っている以上に危機的な状況らしい。

（ううっ、栞ちゃんのぱんつが……おまたに食い込んできてぇ……！　ムラムラするぅ……！）

　ヒクンッ、ヒククンッ！
　じゅわわぁ……。

　おまたから溢れ出してくるのは、おしっこだけではなかった。

　切なげにクレヴァスが痙攣すると、トロッとした蜜がクロッチの裏側へと広がっていく。

　ぱんつのなかはヌルヌルになっていて、まるで生卵を流し込まれたかのような状態になっていた。

（我慢、我慢、我慢……！）

　響虎は心のなかで何度も唱えて、ショーツの不快感と尿意を堪えようとする。

　だけどそんな響虎を嘲笑うかのように、蒸れ蒸れになったショーツはぺったりと響虎のお尻に密着してきていた。

　ぎゅろろろろ……ッ！

「お、おふっ!?」

　いきなりこみ上げてきたのは、便意。
　それはあまりにも突然のことだった。

　蒸れたショーツは、股間の部分は熱いとはいえ、お尻のほうは冷たく湿っている。
　そのせいでお腹を冷やしてしまったのだろう。

（うそ。こんなときにお腹が痛くなってくるなんて……！）

　まだ授業が始まって半分も経っていないというのに。

　こんなタイミングでトイレに行かせてほしいだなんて……しかもうんちをしたいだなんて、恥ずかしくて言えるはずがない。

　せめて休み時間まで我慢しなければ。

（ぐぉぉ……っ。なぜこんなことに……！）

　そう言えば今朝は、毎朝あるはずのお通じがなかった。
　無意識のうちに栞のショーツを汚したらダメだと、身体にセーブがかかっていたとでもいうのだろうか？

（我慢、我慢だ……！　せめて休み時間までは我慢しなければ……！　ううっ、大変なことになる……！）

　ゴロゴロゴロッ！
　ギュポッ！　ギュロロロッ！

　お腹に手をあてて痛みを堪えようとすると、確かに感じることができる。
　体内で、腸が蠢動している感触を。
　それはまるで、大蛇が暴れ回っているかのような感覚だった。

（少しでも気を抜けば……、思春期の死、あるのみ……！）

ゴポポッ！
ギュルギュルギュルッ！

直腸の圧力が、極限にまで高まりつつあった。
もしもいま、お尻の力を抜けば、どんなに楽になることができるだろうか？
この苦痛から解放されたい。
そう思って、フッと意識が遠のき――、

（ダメ！　絶対ダメ！）

きゅううっ！
響虎は再び肛門を閉じようと力を籠める。

せめて。
せめて休み時間まで我慢しなければ。
不幸中の幸いか、気がつけば嵐のような腹痛は弱まっている。

（な、波は越えた……か!?）

冷や汗を流しながら、自らの腹具合を探る。

　どうやらひとつの波を越えることができたようだが……、
　だがまだ油断はできない。

（腹痛には波がある……。まだ、油断できないぜ……！）

　腹痛というものには、波がある。
　ひとつの波を越えても、また第二波、第三波と襲いかかってくるものだ。

　しかもその波は、少しずつ、確実に強まっていき、やがて大決壊へと至る。

（油断したら、ダメだ……！）

　そう思って授業に集中しようとした、矢先。
　体内の大蛇が、再び蠢き出す。

　ゴロロッ！
　ギュルルルルッ！

「おっ、おごっ!?」

　あまりの痛みに、響虎は舌を突き出して悶えていた。

額にはじっとりと脂汗が浮かび、背中には滝のような冷や汗が流れ落ちていく。
栞の女児ショーツは汗とおしっこでぐしょ濡れになっていた。

（だ、ダメだ……、俺のカルマ……！まだ、地獄の門を越えないでくれ……！）

ギュロロロロッ！
ゴポッ！　ゴポポッ！

それは誤魔化しようのない第二波。
直腸の圧力が極限にまで高まっていき、少しでも気を抜いたら漏れ出してきそうになっている。

（椅子に押しつけて……我慢……うおおおおっ！）

ただでさえ女子の括約筋は、男よりも弱い。
それなのに、男よりも溜め込みがちにできている。
響虎は肛門を椅子の座面に押しつけて、便意を抑えつける。

　それはもはや、自分の力だけでは我慢できなくなっているという裏返しでもあった。

（我慢……しないと……！　大変なことに……あううっ！　ダメ、漏れ出してきたら……絶対、ダメだ……！）

　ギュポポッ！
　ギュルルッ！　ゴロロロロッ！

　便意というものは、あまりにも無慈悲だ。
　最初は弱くとも、我慢を重ねれば重ねるほどに強くなり、人間を苦しめる。

　思春期の少女には、その痛みがより強いものとなって襲いかかっていく。

「あっ、ああああっ」

　ぎゅろろろろろろ！　ごぽぽっ！

　自分でも信じられないくらい不吉な音が、お腹から聞こえてくる。
　その激痛たるや、大腸を雑巾絞りされているかのような痛みだった。

（栞ちゃんのぱんつを、これ以上汚せない……！）

ゴロゴロゴロッ！
キュルルッ！　ゴポポッ！

これ以上、栞のショーツを汚すわけにはいかない。

その一心で我慢するけど、しかし人体には限界というものがある。

ふっくらとした思春期の少女の括約筋が、メキメキとこじ開けられようとしていた。

どうやら直腸にあるうんちは、コルクのように硬く、栓になっているらしい。

（だ、め、だ、あああ……っ）

メキメキメキ……！
ギュルルッ！　キュルッ！

不吉な音とともに、コルク状のうんちによって直腸が拡張されていく。

もはやどんなに肛門を閉じようとしても、その進行を食い止めることができなくなっていた。

「うっ、あああああぁぁ……っ」

メキメキメキ。
メリ、メリメリメリ。

どんなにお尻を閉じようと思っても、どんなにお尻を椅子の座面に押しつけても、コルク状のうんちによって直腸がこじ開けられていく。

そして、ついに。

ぶっ、ぶふぉっ。

肛門から奏でられたのは、茶色い炸裂音だった。
それはこれから始まる悲劇への号砲。

その音は無慈悲にも教室中に響き渡り、その瞬間、教室が静まりかえる。

『えっ……？』
『誰だよ、屁ぇこいたの』

　クラスメートの視線が、一斉に響虎へと集中する。

　だけど響虎は、額に脂汗を浮かべて、動くことさえもできなくなっていた。

　響虎の直腸では、いま、この瞬間にもうんちが排泄されようとしていたのだ。

「うっあああああああああっ！」

　メリメリメリッ！
　むりゅりゅりゅりゅっ！

　ついに響虎は力尽きてしまう。
　肛門からフッと力が抜け、その隙を見逃してくれる便意ではなかった。

　極限にまで高まっていた腸圧が、その出口へと向けて殺到し、チュポンッ、硬質便のコルクが飛び出した、その直後だった。

「あっ！　あっ！　あっ！　あっ！」

　もりもりもりっ！
　むりゅむりゅむりゅっ！

　ショーツのなかへと、一瞬にして灼熱のマグマが放たれていく。

　栞のショーツなのに。
　響虎のお尻には、ネットリとしたうんちにまみれ、それでも排泄は止まってはくれない。
　むしろその勢いを増していた。

「だ、ダメ……！　こんなの……うっあああああ！」

　ブリブリブリッ！
　ブリュリュッ！　ブババババッ！

　可憐なセーラー服の、そのスカートから放たれるのは、あまりにも穢らわしい茶色い不浄の音。

　椅子に座っている響虎の座高が、見る間に高くなっていく。
　響虎の身体が、ショーツに詰まった軟便によって押し上げられているのだ。

「んっ、あっ、あああっ、ら、らめぇ……」

ぼふっ！　ぼふふっ！
ぶっふぉっ！　にゅるるるる！

直腸を貫き、這い出してくる軟便はまるで大蛇のようだった。

溢れ出してきた大蛇はショーツのなかで潰れ、茶色いトグロとなって響虎の身体を押し上げていく。

『えっ……うそ……。響虎ちゃんが……？』
『ウンコ漏らしてるのか……？』

シンと静まりかえった教室に、ひそひそ声が妙に大きく聞こえる。
だけど響虎の肛門は黙ってはくれなかった。

「だ、め、だぁぁぁ……っ。こんなの、おかしいのに……！」

ぶりぶりぶりっ！　ブボボッ！
にゅるにゅるにゅるにゅるにゅる！

可憐なスカートから放たれる、穢らわしい茶色い爆音が止まらない。

　響虎のお尻を包んでいるスカートの輪郭は、もこもことその大きさを膨らませていった。
　悲劇はまだ終わらない。

「あっ、あああっ！」

　じょわわわわっ！
　ぢょわわわわわわわわっ！

　噴き出してきたのは、おしっこだった。

　生温かな飛沫がクロッチに跳ね返ると、会陰を伝ってお尻のほうまでもが生温かくなっていく。

　おしっこは、うんちとは違ってショーツから滲み出してきてしまう。

「うううっ、ダメだ……止まらない……ううっ」

　しゅわわわわわわわわわわ……。
　ぶりっ！　ぶぽぽっ！
　むりゅりゅっ！

どんなにおしっこを止めようと思っても、極太の軟便によって肛門を拡張されている。

肛門が拡張されれば、尿道までもが拡張されるのは当然のことだった。

女性器というのは、おしっこを我慢するにはあまりにも不都合な形をしているのだ。

「ぱんつのなかが……、熱い……よぉ……」

シュイイイイイイイイイイイイ……。

スカートから響く、くぐもった水音が止まらなくなっていた。

生温かな恥水がショーツから滲み出してくると、椅子に座っている響虎の太股のあいだに黄河が出現する。

もわっ、もわわぁ……。

響虎を中心として、生温かなアンモニアの湯気が立ち上る。

　それはあっという間に教室に蒸れ返っていった。

　香るのは、アンモニア臭だけではなかった。

　ぶりぶりぶりっ！
　ブボボボボッ！　ボフフッ！

　茶色い炸裂音が何度も響き渡り、可愛らしいスカートから漂いはじめたのは、鼻が曲がるような腐敗臭だった。

　それは本来ならば、誰にも嗅がれることなくトイレの水に流されるべき不浄。

　それをあろうことか教室で、しかもみんなに見られているというのに放ってしまっている。

「お願い……見ないで……。こんなところ、見るなぁ……っ」

　ビチビチビチッ！
　ブジュジュッ！
　しゅいいいいいいいいいいいい……。

口では見ないでほしいと言いながら、しかし思春期の身体は少しでも早く毒素を排泄しよう腸を蠢動させる。

女児ショーツはパンパンに膨らみ、響虎の席を中心としてレモン色の湖が広がっていた。

「あっ！　あっ！　あああっ！」

きゅんっ！　きゅんっ！　きゅんっ！
ぶりりっ！　ぶぼぼっ！　びちちっ！

こんな状況だというのに――。
響虎は軽く達していた。

ショーツのなかではマグマのような軟便が前のほうまで広がってきて、ふっくらとしたクレヴァスに食い込んできているのだ。

容赦無くクリトリスが蹂躙されていき、官能的な高圧電流が身体を、意識までも痺れさせていく。

（き、気持ちいい……）

ブリュリュリュリュッ！
ビチチチチチチチチチチチ！

漏らしながら、こみ上げてきたのは羞恥心を上塗りするほどの快感だった。
ただでさえ我慢に我慢を重ねていたうんちとおしっこを放っているのだ。
更にはクリトリスまでもを蹂躙されている。

排泄欲と性欲。
二つの本能的な欲求を満たし、響虎の身体は無意識のうちにプルプルと痙攣していた。

「あっ、ああぁ……。だめぇ……。ぱんつのなかがヌルヌルになって……、おまたにも食い込んできて……あうっ」

ぶぱぱっ！
プッシャアアアアア……ッ！

一際大きな爆音。
そしてクレヴァスからおしっこが噴き出してきて、響虎の決壊は唐突に終わった。

　それでも漏らしてしまった醜悪な不浄が消えてくれるわけではない。

　響虎のショーツはうんちで前のほうまでパンパンに膨らみきり、響虎の席を中心として大きなおしっこの湖が広がっていた。

「見ないで……。こんな俺を、見ないでよぉ……」

　呟くも、響虎のスカートからは茶色い腐敗臭が漂い、教室に蒸れ返っているようだった。

　クラスメートたちの視線は、響虎へと注ぎ込まれている。

　教壇に立っている先生でさえも、どうすればいいのかわからずに、ただ響虎を見つめているばかりだ。

（うう……っ。穴があったら入りたい……！）

　そう思うけど、そうそう都合良く穴があるはずもなく。

　響虎はおもらしをしたときのまま、自分の席から動けなくなっていた。

　視線を落とし、ただ机の木目を数えることしかできない。

　こうしてどれくらいの時間が経っただろうか？

「せ、先生……っ」

　頼りなさそうな声とともに立ち上がったのは、栞だった。
　席を立った栞は、

「響虎ちゃんの具合が悪そうなので、保健室に行ってきますっ」

　栞は先生の返事も待たずに響虎の席へと駆け寄っていくと、

「響虎ちゃん、立てそう？」
「う、うん……なんとか……」
「それじゃあ保健室に行こう、ねっ」

　小さな手を差し出してくれる栞。
　その小さな手が、響虎にはなぜかとて

も心強いものに思えてならなかった。

☆

　それから。
　響虎は、栞に手を引かれるがままに保健室……ではなくて、トイレへと向かうことになった。

　静まりかえった授業中の廊下に出ると、栞が心配そうに声をかけてくれる。

「大丈夫？　歩けそう？」
「あ、ああ……。なんとか……ううっ」

　響虎はよたよたと歩くことになる。
　なにしろショーツのなかには、うんちがたっぷりと詰まっているのだ。

　いつもよりもお尻が重たく感じられるし、少しでも大股で歩けば、足口からうんちがはみ出してきそうになっていた。

「ゆっくり……、ゆっくりで大丈夫だから」
「ああ……。ううっ、ぱんつが重たい……」

　栞に手を引かれながらも、なんとか一番近い女子トイレへと辿り着く。

　幸いなことに、トイレには誰もいないようだった。
　すべての個室のドアが開け放たれていて、いまなら選びたい放題だ。

　響虎は、よたよたと一番近くの個室へと歩いていく。
　だけど個室のドアを閉めようとするも、栞に止められてしまう。

「だめ。わたしも手伝うっ」
「で、でも……、その……大変なことになってると思うんだけど……。俺の、ぱんつのなか……」
「そんなの覚悟してるもん。それに……この前、響虎ちゃんが助けてくれたこと、とても嬉しかったんだもん。今日はその恩を返すよっ」
「わかった……。でも、驚かないでくれよ……？」
「うん」

　栞の眼差しは真剣そのものだった。

　響虎も覚悟を決めて、スカートの両サイドに手を入れると、ゆっくりとショーツを降ろしていく。

　ネチャ……。
　もわわぁ……。

　露わになったのは、ショーツのなかにたっぷりと詰まった茶色いうんちだった。

　それはまるでカレーパンの具のようにも見える。
　ただし、鼻が曲がるほどの腐敗臭を放っている。

「ごめん……。栞ちゃんのぱんつ、汚しちまった……」

　なんとかネコさんのフロントプリントのショーツを脱ぐと、その布切れにはずっしりとうんちが詰まっていた。

　もはや白い部分を見つけるのが難しいほどに汚辱されている。

「凄い……。こんなにたくさん……」

「そんなに、見ないでくれよ……ううっ」

　こうして失敗を目の当たりにすると、ごく自然に溢れ出してきたのは大粒の涙だった。

　ぱんつを脱いだおまたがスースーして、なんだかとても心許なくなってしまう。

「泣かないで。わたしは全然気にしてないし」
「でも……。こんなに汚れたぱんつ……。栞ちゃんには新しく買って返すよ」
「そんな。もったいないよ」
「も、もったいないって……そんな」
「うそなんかじゃないもん。あ、そうだ」

　目の前に立っている栞は、なにかを思いついたのだろう。

　ほんの一瞬だけ小悪魔のような笑みを浮かべてみせる。
　そして――、

「ふっ、ふうううううう！」

　立ったままで、顔を真っ赤にして息み出したではないか。

　一体なにをしようとしているのか？
　それは響虎からしてみれば明らかなことだった。
　栞は肩幅に脚を開いて、

「んっ、んんんんんん！」

　むりゅむりゅむりゅっ！

　それはあっという間の出来事だった。

　栞のスカートから、ネットリとしたものが溢れ出す音が聞こえてくると、スカートに包まれたヒップラインが一回りも二回りも大きくなった。
　決壊は、それで終わらない。

「んあっ、あああぁぁ……。おしっこも……でちゃ、ううっ」

　しゅごおおおおおおぉぉぉぉぉ……。

　聞こえてきたのは、くぐもった恥ずかしい水音。

　太く、短い尿道から放たれたおしっこは、おむつとスカート、それに響虎のしましまショーツとブルマに遮られているというのに大胆な音を響かせてみせる。

「栞ちゃん、もしかして……おしっこと、うんちを……？」
「うん。しちゃった。響虎ちゃんのぱんつとブルマを穿いてるのに。新しいぱんつを買って返したほうがいい、かな？」
「そんな。もったいない。俺は……栞ちゃんがおもらししたぱんつを穿きたい……」
「よかったぁ……。もしも断られたらどうしようかと思ったよ」
「俺が……断るはずなんてないし」
「それじゃあ、おもらししちゃったぱんつを二人でキレイキレイしようっ」

　頬を赤らめた栞はスカートの両サイドに手を入れると、おむつごとブルマとショーツを降ろしてみせる。
　その瞬間、

もわわぁ～ん……。

　立ち昇ってきたのは、長時間密封されていた、濃密なアンモニア臭。
　そして漏らしたばかりのうんちの匂いだった。
　おむつのなかは、大変なことになっていた。

「きのうから何回も……その、一人でしちゃって……。それに、何回もおしっこしちゃったから……」

　栞の穿いていた響虎のしましまショーツは、濃厚な黄色に染め上げられていた。茶色と言っても過言ではないほどの濃さだ。

　それにお尻には漏らしたばかりの柔らかうんちが鎮座していた。

「さあ、早く洗っちゃおうっ」
「俺は栞ちゃんが穿いてるぱんつを洗うぜ！」
「うん。私は響虎ちゃんが穿いてたぱんつを洗うね」

　お互いに穿いていたぱんつを洗うことにする。

　トイレを何回も流しながら、貯水タンクに溜まっていく水を使って、レモン石鹸で丹念に。

　響虎はおしっこでビタビタになったスカートも水洗いしていく。

「よし、綺麗になったぜ」
「うん。次は乾かしに行こうっ」
「ちょっ、俺、ノーパンでノースカート……っ」
「大丈夫。授業中だから誰もいないよ。……多分」

　こういうときの栞は意外と大胆らしい。
　栞自身もノーパンだというのに、響虎の手を引くとトイレを出て、誰もいない廊下へと歩きだしている。

　手を引かれてやってきたのは被服室だ。
　幸いなことに空室で、なかには誰もいない。

　ドライヤーを借りるのならば今がチャンスだ。

　響虎と栞は、ショーツとブルマ、そしてスカートを乾かすことができたのだった。

　栞は元のフロントプリントの猫さんショーツを穿いて。
　響虎はピンクと白のしましまショーツにブルマを穿いて。

　スカートも乾かしたから、響虎はスカートも穿く。

「よしっ。これでバッチリだぜ！」
「授業、出れそう？」
「ああ、せっかく栞ちゃんが洗ってくれたぱんつ穿いてるんだし、な！」

　乾かしたばかりのショーツはふかふかとしていて、響虎のお尻を優しく包み込んでくれている。
　そのことを意識しただけで、

　じゅわり。

　響虎のクレヴァスは熱くほどけ、蜜を垂らしていた。
　クロッチの裏側には、早くも熱い染みが広がっている。

「あっ……」

　不意に栞が短い声を漏らし、頬を赤らめる。
　きっと栞も同じなのだろう。
　その証拠に、栞の太股も鮮やかなピンク色に染まっていた。

「俺も……だから。今日はなんかいいことありそうだぜ！」
「うん。いいこと、ありそうっ」

　響虎は栞の手を引くと被服室をあとにする。
　ちょうどそのときチャイムが鳴って休み時間になった。
　教室に戻るには、またとないチャンスだ。

　こうして――。
　響虎は何事もなく次の授業から復帰することができた。

　ちなみに教室で漏らしてしまったおしっこやうんちは、保健係の女子が掃除をしてくれたので、しっかりとお礼を言うことを忘れない。

　響虎はつい数十分前に、教室でうんちを漏らしたことが信じられないくらいに、しれっと自分の席について授業を受けていた。

（栞ちゃんには感謝、だな）

　いつもは守ってあげたいと思っていた栞。
　それなのに今日は守られてしまった。

（この恩はいつか返さなければ……！）

　響虎は人知れずに決意を固めるとともに、

（もっと栞ちゃんのことを知りたい……！）

　そう思うのは、ごく自然のことかもしれなかった。
　栞ちゃんのことをもっと理解したい。

　栞ちゃんみたいに……、おむつをあてて登校したい。
　いつの間にか、響虎は栞のことしか考えられなくなっている。

　そうだ。
　学校におむつを穿いてくれば、栞ちゃんと同じになれるかもしれない――。

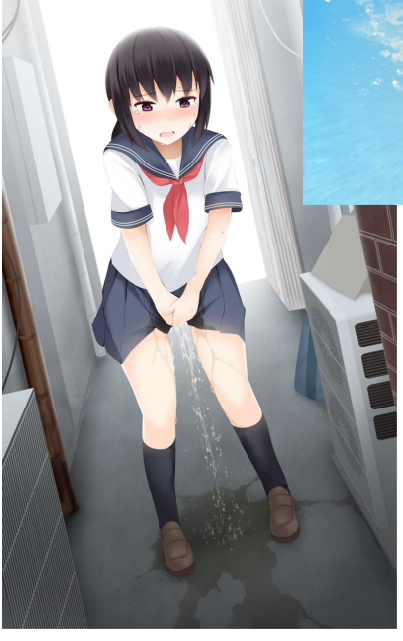
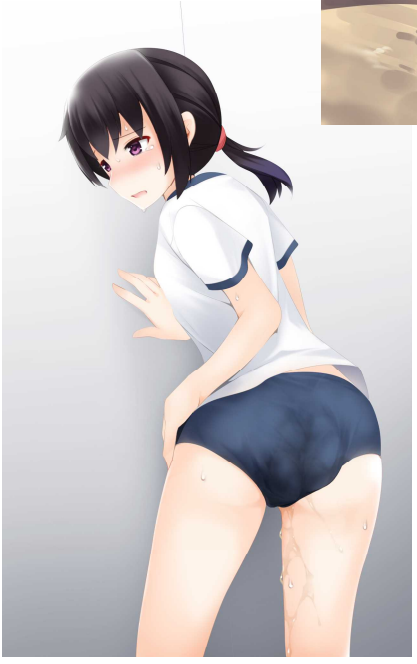
☆

ここまで読んでくれて、
**　ありがとうございました！**
**　　体験版はここまでです。**

次のページからは、
**　既刊のCGの紹介です。**

骨の髄まで楽しんでもらえると、
**　とても嬉しいです！**

既刊紹介



大決壊
潮風のメモリー